

新しき年にまたれし春かすみけふこそ四方に立渡りけれ
今朝たつやまほなる春の八重霞

一、卯辰八幡宮にて

十五日。卯辰山八幡宮参拜。献和歌一首及最花百足。

八幡山まつも色そふ春風にゆきの下くさあらはれぞする

二十日の夜朧月を詠て

山高み花にうつろふおもかけを雪におほめく朧夜のつき

一、有栖川宮の御合點

去年田中一閑養子平丞成泰爲勤學上京の頃、附二十首の

愚詠以希堂上方御添削。然有栖川幸仁親王御点の儀申請、

此頃被成下候由にて二月二十五日落手、頗泰喜の至以何

加之。則御合点の八句左に記之。

立春

たちなびく霞のすゑも武藏野の眼しられぬ春は來にけり

早春

雪閉ぢし谷の戸ほその明ぼのにおとづれそむる春の山水

月前梅

梅が香にさうで休らふ柴の戸を明るまでとや月の霞める

春夕

鐘の音もかすみの底に埋もれて日影残らぬ春のやまの端

三 舊宅の花の散けるを見て

來てみれば芦の中垣ひまあれて葎がうへに花ぞ散りける

初郭公

郭公夢かうつゝかまよひにきいまいこそゑに初音さだめよ

寄川述懐

思ひ川よし絶えやらで流るとも心の水の下よどまずもかな

五月初かた、母の喪にこもれりける人のがり、申つかはし
ける。

雨そゞぐ軒の菖蒲の雫にもうきねを袖にかけて佗ぶらん

一、先考の三十三回忌に

三月十二日。先考久俊君三十三回忌、松月寺にて佛事供養。

但實は七月に候得共東行に付、今月當之。和歌七首奉之。

なげきこしその年月は何ならし跡とふけふのそでの春雨

昔思ふ心の水や増るらんせきあへぬけふの袖のたきつ瀬

ありし世を且おもへし身にしあらば思ひ出ても慰やせん

三十あまりみとせふりゆく春雨や昔忍ぶの露を添ふらん

誰かまたかゝらざる世と思へども猶忍ばれぬ身の歎かな

ふし柴のしぼくむすぶ袖の露はかなき夢の昔がたりに

つれづれと思ふ昔に暮されて其世ながらの月さへも見ず

一、昌藏の舎にて

十六日。昌藏の家にて

わすれめや月もにほへる木間より花のみ雪の故郷のそら

一、淺間嶺の雪を眺めて

卯月八日。信州淺間の嶺に雪見ゆる。蒼々たる空に白妙の

雪のけしき、長途の躰を散ぜしめし也。

いひしらぬ其富士の根に比べても何か淺間の今朝の白雪

一、菊池武康の歸郷に贈る

二十六日。菊池武康近日歸郷あるべきに付、蜂腰一首短冊

に遣す。

別れゆくけふぞ卯月の名にしあふ音にこそたてね山郭公

ほととぎすの音よせて、別を思ひたまふ御心ざしの

あさからぬ御詠め、かぎりしられぬあはれは、ことに

出てはえこそ。只打思ふことの葉を、筆にとどめおく

ばかりになん。

かへるさの道は卯月の郭公いかにしかじと鳴音なるらん

一、筆にまかせて

二十五日。風と筆にまかせて。

山深く住身なりせば世中のよしあしいかでわけ迷ふべき

けふいか山路暮らしつ郭公いま一聲にあかれやはする

一、村金左衛門の計を聞きて

前月二十八日、村金左衛門實玄死去のよし計音をきく。村

宗次郎一實方へよみて遣す。

けふや夢きのふや夢とわけ迷ふ袂ながらに露ぞくだくる

又此序におもひつゞく。

定めなき世をそれながら迎られて有し現も夢かと思ふ

一、室直清が即事の一律に和す

五月十二日、今夕直清許より有消息。即事の一律。

空庭經雨後。日々長青苔。林暝樹如烟。天低雲似灰。故園梅

已熟。客舍爭將催。蜀魄不飛去。聲々猶吐哀。

和せよなどせめ聞えらるまゝ、末字にたよりぬ。

ほととぎすみくさの友もなき宿をたえず音なふ聲の哀さ

一、田中一閑より所勞を問れて